

# 九百九十両

野村胡堂

—

「親分」

「何だ、八」

「腕うでが鳴るね」

仰あおぎました。

ガラツ八の八五郎は、小鼻をふくらませて、親分の錢形平次を

九百九十両

初夏の陽を除け除け、とぐろを巻いた縁側から、これも所在な

く吐月峯ばかり叩いている平次に、一とかど言い当てたつもりで声を掛けたのでした。

「腕の鳴る面づらかよ、馬鹿野郎。近ちかごろお湿しみりがないから、喉のどが鳴るんだろう」

「違ちがげえねえ」

平掌ひらてで額をピシャリ。この二三日スランプに陥おちいつて いる平次から、この痛快な馬鹿野郎を喰くわせられるのが、ガラツ八にはたまらない嬉しさの様子です。

「八、あれを聞くがいい」

「誰か来たようだ、飛んだ面白い仕事かも知れないよ」

「」

「家の前を往つたり来たりしているだろう。入ろうか入るまいか、先刻から迷つてゐる様子だ、——女の跔音あしおとだね」

平次の言葉が終らぬうちに格子が開いて、お静が取次に出た様子、若い女の低いが弾はずみ切つた声が聞えます。やがて通されたのは、二十歳はたちそこそこの愛くるしい娘、何やら悩みに打ちひしがれて、部屋の隅に小さく俯向きました。

上げるのです。

「俺は平次だが、どんな用事で来なすつた。思い切つて打ち明けてみるがいい」

平次はこの娘の裡から善良なものを感じました。

「親分さん、父さんととを助けて下さい。父さんは頸を縊くくつて死ぬんだといつて、どうなだめても聞いてくれません」

「成程、それは大変だろう、——お前の父さんというのは何だえ、稼業は？」

九百九十両

す。

平次は娘の昂奮こうふんを外らさないように、心持ちせき込んで訊ねます。

「灸点横町（神田佐久間町）の多の市でございます」

「あ、蛸市か。すると姐さんはお浜さんかい、道理で——」  
縁側からガラツ八が長い顎あごを出します。

「黙つて引込んでいろ、馬鹿野郎くらッ」

平次の一喝かつを喰くらつて、ガラツ八は頭を叩かれた蝸牛かたつむりのように引  
込みました。

もつとも、娘の名乗るのを聞いて、ガラツ八が乗り出したのも  
無理のないことだつたのです。灸点横町の多の市というのはお  
灸きゅうと鍼はりの名人で、神田中に響いた盲人ですが、稼業かたわの傍かたら高利あだなの  
金を廻し、吸い付いたら離れないからというので、蛸市と綽名を

取つてゐるほど、強か者したたかだつたのです。

その娘のお浜の美しい話も、ガラツ八は聞き飽きるほど聞かされておりました。ポチヤ。ポチヤして可愛らしくて、若い男の心をひしと掴つかましたには措おかない——という噂のお浜が、この物に怯えおびて雁皮紙のようになぶれてゐる娘とは思ひもよりません。

「そう仰しやるのも無理はございません。父さんは本当にお金を溜ためるのに夢中だつたんですから、——その命がけで溜めたお金が九百九十両、誰かに盗まれてしまつました」

「九百九十両？」

九百九十両

錢形平次は驚きました。九百九十両といえば、千両にたつた十

両欠けただけ、聞いただけで一寸ドキリとさせる大金です。

千両分限という言葉が、今の千万長者と同じ響を持った時代、

十両から上の泥棒は首を斬られた時代——に、灸点横町の裏

長屋で、九百九十両溜める人間も溜める人間なら、それを盗む奴も盗む奴——と思つたのでした。

「父さんは——あの金を盗られては、生きている張合もないから、助けると思つて殺してくれと、泣いたり暴れたり」

お浜の眼——訴えるように平次を仰ぐ黒い眼は、夕立を浴びた  
ようにサツと濡れて、ハラハラと拭いもあえぬ涙が膝にこぼれました。

「順序を立てて詳くわしく話すがいい、随分力になつてやらないものでもない」

平次は膝を進めました。

「お父さんはこの二十年の間、蛸市たこいちとか赤鬼とか、世間様から存分なことをいわれながら、一心不乱にお金を溜めました。随分痛々しい取立てもしたそうですが、その代り私達父娘おやこの身も詰められるだけは詰めたのです。爪に火つめひを灯すと言いましょうか、三度の物も二度にして、十年越し、浴衣ゆかた一枚買つたこともございません」

九百九十両

お浜はまは一生懸命さの中にも顔を赧あからめました。着ている浴衣は、

別れた母親譲りの品らしく、二三十年前江戸で流行った、洗い晒しの大時代物、赤い帯も芯しんがはみ出して、縫つろい切れぬ浅ましい品だったのです。

「そんなに金を溜めて、何をするつもりだつたんだろう」

平次のような、宵越の錢さえ持たない者には、烏金からすがねまで貸して溜める人間の心理が解りません。

「盲目の望みは検校けんぎょうでござります。眼が見えないばかりに、艱難辛苦して育つた父さんは、人様に馬鹿にされる口惜しさくやが昂こうじて、一生のうちには、石に囁かじり付いても検校の位に上り、今まで片輪者を馬鹿にした人達を、眼下に見てやろうと思ひ立つたのです」

「成程ね」

「そのために配偶<sup>つれあい</sup>の私の母とも別れ、娘の私だけ引取つて、母がその日の暮しにも困つてゐるのを知りながら、十年越し仕送りもしませんでした」

「」

「三十年間、夢にも現<sup>うつつ</sup>にも、口癖<sup>くちぐせ</sup>にいつたのは、——俺はきっと検校になる、どんな事をしても検校になる——と

盲人の恐ろしい執念<sup>しゆうねん</sup>は、お浜の口を通して、平次の身にも迫ります。

「検校の位になるには、千両要るということだが、お前の父さん

はその用意の金を盜られたのかい。なるほど半狂乱になるのも無理のことだ』

平次も次第に多くの市父娘の苦惱が解つて来ました。

## 二

盲人の保護は中古以来のことですが、徳川時代になつてその制度を確立し、上は検校総録けんぎょうそうろくから最下位の半打掛座頭はんうちかけざとうに至るまで、階級を七十三の小刻みこきざに分けました。

九百九十両

この盲官のことは、くわしく書くと際限もありませんが、この

物語に必要な程度だけ、ほんの概略を抄くと、——盲人の官途は四階十六官、七十三刻じくと定められております。四階とは検校、別当、勾当、座頭、十六官とは座頭に四度の階級があり、勾当、別当、検校それぞれ次第があつて、都合十六に分れていることを言い、七十三刻とは、半打掛から中老引ちゅうろううびきまで六十七刻、正検校から五刻六老を経て、職總検校まで都合七十三の階級のあることを言うのです。

これらはすべて盲人保護の官位で、昔は人物技芸ぎげい一世に秀ひいでた者を任じたのですが、後、足利時代から売官の風が行われ、江戸時代には売官料まで公定されて、一階一両から四十五両に及び、

七十三刻を併せると都合七百十九両、——つまり座頭の最下位から、最高位の惣晴まで進むには、七百十九両の金を必要としたことになつたのです。

更に時代が下くだると、七百十九両さえ納めれば、一介の土盲どもうが、一夜にして検校けんこうにもなれたというのですから、野心的な盲人達が、金を作つて検校の位えを獲えようとしたのも無理はありません。検校になると、世の尊崇そんそうを集めばかりでなく、官物官金の配当、名目金貸付の収益など、夥おびただしい役得が付隨ふづいしたのでした。

がつて、この俺を虫ケラのように思つた長屋の奴等や、俺に足腰を揉ませて大きな面をした町内の旦那衆を見返してやるから、——というのが口癖で、好きなものも食わず、温かいものも着ず、千両になるのを楽しみに働いて働いて働き抜いたのです」

お浜は浅ましいことのように語りつづけました。平次の無言の獎励しょうれいがなかつたら、こうまで親の耻はじを打ち明ける勇氣もなかつたでしよう。

「七百十九両で沢山な筈はずだが——」

九百九十両

「検校になるのは、七百十九両で済みますが、京都へ上る路用から、検校になつた時、見苦しくない身装みなりや住居も要ります。父さ

んはそんなこんなで、千両溜めたら京都へ上るつもりで、そればかり楽しみにしておりましたが、千両へあと十両という時、魔がさしたのでしよう

お浜の言葉も昂奮が去るにつれて、次第に淋しく滅めい入ります。  
「それを盗られたのだね、どこへ隠して置いたんだ」

平次は話の無駄をかり取るように、こう言葉を挟はさみました。

「太ふとい竹筒たけづつへ入れて、父さんの寝る三畳の置床の隅に掛けて置きました」

「不用心なことだな」

「竹筒は置床の柱のように見えました。誰もあんなものに千両近おきどこ」

い小判が入っているとは思いも寄りません」

「成程そういったものかも知れない。で、無くなつたのは何時だ」「三日前の晩でございました」

「」

「明日は、貸した金が十両入るから、いよいよ千両の願いが叶つた——と、父さんは珍しくお酒を呑んで、上機嫌で寝ましたが、その晩

「待ってくれ、泥棒は確かにその晩入つたに相違あるまいな」「寝る時まで、間違いもなく竹筒はあつたんですから」

「それからどうした、順序を立てて話してくれ」

じゅんじょ

平次は静かに煙管を取上げました。

「酔つた勢いで、竹筒の柱を撫でて、上機嫌で休みましたが、翌朝になると、雨戸は開いて、置床の前の竹筒はなくなっていたのです」

「雨戸は締りしまがなかつたのか」

「そんなものはございません。盲目めくらの家へ入る泥棒もあるまいから」と、父さんは締りもろくにさせなかつたのです」

「フーム」

九百九十両

「竹筒がなくなつたと判ると、父さんは死ぬほどびっくりしましたが、お上へ届けて、そんな大金を持つていたと知れるのが嫌だ

し、盗られた金が滅多に出たためしもないからと、私と二人で家の中を捜しました

「お届けをしないというのは乱暴だな」

平次はそう言いましたが、その頃の岡つ引警察制度の欠陥を一盲人に指摘してきされたような気がして、何んとはなしに小鬢こびんを搔きます。

「何処を捜す当もありません。半日考えた揚句あげく、隣町の道尊坊どうそんぼうに頼みました

「何だ、あの似非修験者えせしうげんじやか」

「でも他に頼る人もありません。——道尊さんは早速やつて来て、

護摩ごまを焚たいて祈たまつてくれましたが、何のしるしもありません

「大金が無くなつたと聞いて近所の衆も祟たたりを恐れて寄り付かず、仕方たたがありませんから、暴れ狂う父さんを、仲の好い佐の市さんとお祈りに來た道尊さんにお願いして私はちよつと抜け出して來ました」

お浜は語り終つて吐息といきを吐つくきました。何か娘心では背負い切れ  
ない、大きな恥の塊かたまりをおろして、ホツとしたような心持でしう。

「そいつは氣の毒だ。命がけで溜めた千両を盜られちや、死にたくもなるだろう。見つかるか見つからないか解らないが、とにかく行つて見るとしようか」

平次は氣さくに言つて、煙草入れを腰に——立上がつたのでした。

### 三

銭形平次と八五郎は、お浜に案内させて、すぐ佐久間町の灸点きゆうてん横町へ駆け付けました。

「さあ、殺せ——殺してくれ、お願ひだから殺してくれ」

危ないドブ板を踏ふむと、奥からは押潰おしつぶされたような声。平次は、さすがにギョツとして立止ります。

「八、——お浜はどうした」

平次はフト、一緒に来たお浜の姿の見えなくなつたのに気が付きました。

「へツ、へツ、へツ」

「何を笑やがる」

「路地の外を覗いて下さいよ、親分」

八五郎の指す方を、二三歩戻つて覗くと、お浜は二十二三の若い男の胸に顔を埋めるように、何やら熱心に話しているではありますか。



「ありや何だ」

「経師屋の吉三郎——てんで、飛んだ二枚目さ、ヘツヘツヘツ」

「やツかむな、八」

「妬<sup>や</sup>くわけじやねえが、少しほは氣になりますよ、親分」

「お浜に男があるとは氣がつかなかつた。構うことはねえ、一と  
当り当つて見るがいい」

「縄を掛けるんですか、親分」

「あわてちやいけねえ、この家と掛り合いの人間で、最初に逢つ  
た男だ。訊いたら何とか言うだろう、懐<sup>ふところ</sup>の十手を引っ込めて、

「へエ——」

八と別れて、平次は多の市の家へ入つて行きました。

「お願ひだ、殺してくれ。俺はもう生きる精も張合も抜けた——二十年この方、女房まで追い出して、食うや食わずで溜めた金だ。せめて盗んだ野郎へ面當てに、頸でも縊くくつて死んでやつてよ、化けて出て怨うらみが言いてえ」

怨に燃えるような声は、ツイ鼻の先の破れ障子の中から、護摩ごまを焚たく凄すさまじい煙と共に湧き起るのでした。

そう言うのは主人多の市の仲好し、佐の市という盲人でしよう。  
あるじ

「御免よ」

平次はガラリと障子を開けました。

「誰だい？ 取込みがあるんだ。もみりようじ揉療治なら後にして貰いてえが

」

佐の市が見えぬ眼を剥きます。

「俺は平次だが、何か間違えがあつたそうじやないか」

「あッ、錢形の親分さん」

取乱した多の市が、平次の声を聞くと這出しました。

中はたつた二た間、想像以上の凄まじい住居で、ここに千両近

い金などがあろうとは、どう間違つても考えられません。骨ばかりの障子、芯のはみ出した畳、壁は落ち、戸はささくれて、家具らしいものは、七輪が一つに鍋が二つ、茶碗やら丼やらが、棚の上に四つ五つ並んで、柱には着換えの襤襤ぼろが一二枚ブラ下がつているだけ、さすがの平次も、しばらくは言葉もありません。

「錢形の親分さん、九百九十両盗つた野郎を搜し出して、磔刑はりつけにするなり、八つ裂ざきにするなり、思い知らせてやつて下さい、お願

い」

上框あがりかまちに腰をおろした平次の袂へ、多の市の瘦せさらばえた手が、ワナワナと蔓草つるくさのようにならからに絡み付くのです。

「まあ、待ちな、一と通り見て来るから」

平次は言い捨てて、家の内外を一と廻り、あまりの無造作な住居で、手掛けも何にもありません。

多くの市の寝てているのは奥の三畳、お浜の寝ていたのは入口に近い四畳半、その外には狭い濡縁ぬれえんがあつて、二つの部屋の隣りに小さいお勝手があります。

「ここに千両近い金のあるのを知っているのは誰と誰だえ」

元の座へ帰つて来た平次の問いは常識的でした。

「娘の外にはありません」

——お浜の外にも嗅ぎ付けた人間があるだろう

「世間ではそんな噂をしておりますが、九百九十両と纏まつた金を竹筒の柱に入れて持つていると知つているのは、娘たつた一人でございます」

「大金を持つていることを知つている者なら他にもあるだろう」

「それはもう、——現にここにいる佐の市さんだつて、私が検校になりたさに、金を溜めていることは知つている筈です」

「それは、多の市さん」

九百九十両

佐の市は驚いて口を出しました。<sup>あるじ</sup>主人と同年輩の四十五六、同じ稼業には相違ありませんが、これは人に金を貸す方ではなく、

始終借りて いる方で、酒も呑み、遊びも好き、身装も相当で、内々  
は富籤とみくじまでも買つて いるといつた山氣のある按摩あんまでした。

「それから」

平次はそれに構わず問い合わせました。

「十年前に別れて、今でもときどき無心に来る女房のお皆も薄々  
は知つて おります。それに隣のお角さんだつて、小判の音位は聞  
いて いるで しよう、それから——」

「——」

多の市は一寸考えましたが、

「娘にちよつかいを出している経師屋きょうじやの吉三郎の野郎だつて娘

から聞いていないとは言われません」

「それっ切りか」

「へエ——」

多くの市は覚束おぼつかなくも言い切れます。その間にも、修験者の道尊坊は、護摩の煙を濛々もうもうとなびかせながら、揉みに揉んで何やら祈り続けていたのでした。虎髯とらひげの四十男で、あまり知恵のありそうな人間ではありませんが、様子と声の物々しさに、妙に狂信者の心を囚とらえそうなところがあります。

「この家を明けるような事はあるまいな」

九百九十両

「それはありません。何と言つても、千両近い金があるんですか

ら、私が仕事に出る時は、必ず娘に留守番をさせました

「お前が一番怪しいと思うのは誰だい」

「へエ——」

「遠慮なくいうがいい」

「壁へ穴をあけて、朝夕覗いている人間が一番気になりますよ、  
親分さん」

「——」

九百九十両

平次はそう言われて二軒長屋の境の壁を見ました。成程多の市の部屋の柱寄り、ちょうど畳から五六寸上が、向うから壊された  
ように、ポコリと土が落ちてているのです。

「その小判を入れた竹筒の長さはどれほどあつたんだ」

「置床の端つこの臍（へそ）へ立てて、上の梁（はり）へはめ込んだんですから、七尺はありましたよ」

「目方は？」

「五貫目もあるでしょう」

それでは女子供には相当の荷物です。

## 四

平次はその足で直ぐ壁隣りの相長屋、後家の内職で細々と暮らし

ているお角という大年増の家を覗きました。

「親分さん、錢形の親分さんでしよう。よく存じていますよ、隣の蛸市たこいちが、私がいちばん怪しいって言つたでしよう、五貫目もある小判入りの柱が私に持てるか持てないか、考えても見て下さいよ、ね、親分さん」

顔を見ると、もう立て続けにまくし立てます。三十七八の青白い女、どこか病氣でもある様子ですが、昔は相当に踏ふめたらしい眼鼻立ちで、さわやかに動く舌の根はどうも素人育しろうとそだちではありますせん。

「竹筒ひきづを引摺てる術もあるぜ、お神さん」

「まあ、親分さん、お口の悪い、蟻<sup>あり</sup>が蚯蚓<sup>みみず</sup>を運ぶんじやあるまいし」

「ちょいとここを借りるよ」

「さアさアどうぞ」

怪しげな座蒲團を敷いたのは、多の市とは反対側になつている  
濡縁<sup>ぬれえん</sup>です。

「ところで、何も彼も知つて いるようだから、つまらない事は抜  
きにして訊くが、お神さんに心当りはなかつたのかい」

女世帶らしく小綺麗に片付いた家の中を見廻すともなく、平次  
はこう訊きました。

「お生憎様、何にも知りませんよ——でもね、親分さん。あの佐の市というのは、お隣りの蛸市たこいちの朋輩ほうばいのくせに、打つて變った道樂者で、蛸市にはうんと借金があるようだし、それに蛸市けんぎょうが検校になるのを、いちばん嫌う人間ですよ」

「成程ね」

「その上、滅法めつぱうカンのよい盲目めくらで、賭かけ碁ごまでやるという位だから、眼が見えなくたつて、戸閉とじまりのない朋輩のうちへ、泥棒位には入りかねませんよ」

「まア、親分さんはお世辞ものね」  
「それは知らなかつた。有難うよ、お礼をするぜ、お神さん」

「ところで、その壁の穴から、あの隣の置床のあたりは見えないだろうか」

「まあ」

「ちよいと覗かして貰うぜ」

「悪戯わるさをしたのは鼠ですよ、親分さん。近頃の鼠はそりやタチが

悪いから、壁でも板戸いたどでもすぐ喰い破りますよ」

「そうだろうとも、よい年増が、こんな穴を拵こせえて隣を覗くわけ

はねえ」

「まあ、親分さん」

お角の抗議を空耳そらみみに聞いて、平次は狭い濡縁せまから三畳の間に乘

出すように、穴から隣の家の方を覗いております。

## 五

「ちよいと待つた」

「あ、銭形の親分さん」

吉三郎はギヨツと立止まりました。お浜や八五郎に別れて、  
原河岸の宵明りを、自分の家の方へ急いでいたのです。

「少し聞きたいことがあるんだ」

「私は何にも知りませんが、親分さん」

吉三郎はお浜から事件の概略がいりやくを聞いたらしく、平次の前に立竦たちすくんだ顔は、不安に顫えておりました。

「お前を九百九十両の盜人ぬすつとだと思つてゐわけじやねえ。実は先廻りして、あの晩お前が家から一と足も出ない事を聞いて來たんだ」

「へエ——」

平次の行届いた言葉に、吉三郎は安心よりも驚きが先でした。

「だから、知つてるだけの事を、みんな話してくれさえすればいい、——お前はお浜といつ頃からの仲なんだ」

「三年になりますよ、親分さん」

吉三郎の声は悲しそうです。二十二三の少し柔和にゅうわだが良い男、

お浜が夢中になるのも無理はない——と、平次は見ております。  
「親父の多の市が不承知なんだろう。どうしてもいつしょにしね  
えというのか」

「へエ——検校になつた暁あかつき、経師屋の下職むこじや婿にならねえ——  
と

「泣くな、大の男が見つともねえ」

「どう頼んでも多の市さんは聞いてくれません。心中をしようか、  
夜逃げをしようか、と何べんも切り出しましたが、お浜はどうし  
ても承知してくれません、——因業いんごうなようでも父親に違いないし、  
眼の不自由な者をたつた一人捨てて、死にも逃げもならない——

とこう言います

「いい心掛けだな」

「私にはそのいい心掛けが嬉しくありません。三年越しの深い仲、こんな苦労をした揚句、大地へ額を摺り付けて頼んでも、添わせてくれない親が、そんなに大事なものでしようか、親分さん

「」

「もし検校などになる望みがなかつたら、——あの千両近い金がかつたら、多の市さんも堅気の職人に娘をくれる気になつたでしょう。私はお浜さんからその話を聞いて、本当に——いい気味だと

「吉三、少したしなむがいい。それでなくてさえ、お前は疑われているんだよ」

「へエ——」

こんな純な若者を、平次もこの上追及ついきゅうする気にはなりませんで  
した。

「まあ帰つてよく気を落着けるがいい。つまらねえ氣を起してお  
浜を困らせるんじやないぞ」

「へエ——」

何という間の悪さ、気のきかない叔父さんのような事をいって、  
平次はぼんやり家へ帰りました。

「親分」

先廻りして待っていたのは、ガラツ八の八五郎です。

「何だ、八」

「九百九十両の盜人の当りはつきましたか」  
ぬすつと

「それがつかねえ」

「あんな馬鹿氣た事は、半刻はんときで判りそうじやありませんか」

「それが半日かかるて眼鼻もつかねえ、——どうだ、八、聴いて  
くれるか」

「へエ——」

九百九十両

「今日一日で搜さくつたことを纏まとめて話すうちに、何んかよい知恵が

浮ぶかも知れねえ。鼻を掘らずに、神妙に聴くんだよ」

「へエ——」

八五郎はあわてて長い顎あごを撫なででまわします。

「お浜は親孝行だ、あの娘が父親の金を盜る筈はずはねえ」

「へエ——」

「だが、あんな狭い家で、締りがなかつたにしても、酔酔つ払ぬぐつて  
いる多の市はともかく、若い娘のお浜が、自分の枕から一間とも  
離れねえ置床はしづの柱を外はずして持もつて行くのを、知らずにいるはずは  
ねえと思うがどうだ。あの竹筒を外はずすと、置床はしづの臍へそがきしむのは、  
木口の光る様子で見ても解わかるぜ」

1

「すると、お浜は泥棒を見て いるはずだ。見ていても言えなかつた——と考えたらどうだ」

「八工」

「お浜がそれほど庇かば

「お浜がそれほど庇つてやる人間は、吉三郎の外にはねえが、吉三郎はあの晩一と足も外へ出なかつた。——それに、盗むのを見たら、大きな声を出さず、一度は泥棒を庇い立てしたお浜が、三日目に俺のところへ飛込んで、泥棒をつかまえてくれと泣きついたのはどういうわけだ」

九百九十両

「フレーム」

ガラツ八の鼻の穴の大きいこと。

「すると、最初お浜が自分の知っている者の仕業しわざと思い込んだのが間違いで、後で赤の他人の仕業と判つたのかも知れないな」

「」

「置床の柱に小判が入っていると知っているのは、お浜と吉三郎の外に、隣の後家ごけのお角がある。あの壁の穴から、多の市の部屋は見通しだ。が、お角は華奢きやしゃで病身らしいから、とても五貫目もある小判の柱を盗める筈はない」

「お角が人に頼んで盗ませたら、親分？」

九百九十両

「それも考えた、が、あの女は人に物を頼める女じやない、疑い

深くて、勝手で

「お角に男がありやしませんか」

「不思議にない様子だ、それがあの女の病氣だ」

ここまで来ると、平次もハタと行詰ります。

## 六

それから三日目、すっかり腐くさつてしまつた平次。

半氣違はんきちがいの多の

市に悩まされて帰ると、

ガラツ八が眼の色を変えて飛んで来ました。

「何だ、八」

「足がつきましたよ、親分」

「何の足だ」

「九百九十両の片かけらを使つた人間があるんで」

「何だと？」

「あの長屋に、小判で買物をした奴があつたらどうします」

「えツ」

「お角の阿魔あまですよ。昨日越後屋えちごやへ行つて單衣ひとえと帶を買つて小判

九百九十両

「よし、行つて見ろ」

二人は宙ちゅうを飛びました。灸点きゅうてん横町へ来て、お角の家の格子を引開けると、

「御免よ」

飛込むのといっしょでした。

「まあ、親分さん」

「お角、小判をどこから出した。隠しちゃためにならねえよ」

いつにもなく平次もせき込んでおります。

「まあ、いきなり飛込んで来て、——そんな事が訊きたいと仰しやるの、親分さん。こ、こ、こ、小判は天下の通用金ですもの、

どこにでもあるじやありませんか」

お角は事もなげに笑いますが、平次の気組を受けかねて、さすがに青くなつております。

「そんな言いわけを聞くんじやない。小判をどこから出した、それを言つて貰おうか」

「贍<sup>へそ</sup>くりですよ、親分さん」

「えツ、しぶとい女だ。十両の上は盜みも打首獄門<sup>うちくびごくもん</sup>だ。黙つて縄を打つて引立てる、無事では済むまいぞ」

「」

す。

「お前が五貫目もある竹筒を担ぎ出したのでないことは、この平次がよく分っているが、お白洲の砂利の上ではそんな弁解は通らねえぞ。さアお角、小判をどこから出した。ここでいうか、それとも」

「いいますよ、親分、いいます

「どこで、誰から貰った

「貰ったんじやない、拾ったんです

「何?」

九百九十両

「あの日の朝、お隣の前のドブ板の隙間すきまから拾いましたよ」

「何枚あつた

「小判が三枚

「本当だな」

「嘘なんか言うもんですか、親分さん

「何だつてまたすぐ使つたんだ」

「貧乏人が小判を持つちや使わずにいられませんよ。たつた四五  
日懐の中へ入れて置いてただけで、持病の癪しゃくを起しそうになつた  
じやありませんか」

「ともかく、あとでお呼出しがあるかも知れない。当分どこへも  
出ちやならねえよ」

「へエ」

「小判の残りは町役人に預ける、何枚ある」

「二枚と一朱残しましたよ」

「呆れた女だ」  
あき

平次とガラツ八は、その金を町役人に引渡して、ぶんぶんして  
引揚げます。

が、事件はその晩のうちに、思わぬ方へ発展してしまったので  
す。

翌る日の朝。

九百九十両

「親分」

「また大変の壳物か、八。今度は何だ？」

飛込んで来た八五郎の顔には、全く大変という字が草書で書きなぐつてあるように見えたのです。

「お角が殺されましたよ」

「何？ お角が、そいつあ大変だッ」

飛んで行つた時は、町役人と弥次馬が来て、朝の路地が押すな押すなの騒ぎ。

「退いた退いた、見世物じやねえぞ」

搔きわけて入つて見ると、お角は浅ましくも床の中に絞り殺されて、無氣味な白い眼に、怨多い壁の穴を睨んでいるのでした。

頸へ巻きつけたのは、お角の細紐、四方を見ると大して取乱した様子もなく、ほんの一と思いに殺られたことは解りますが、余つ程慣れた奴と見えて、後に毛程の証拠も残しません。

隣の多の市の家で訊きましたが、多の市は金を盗まれてから半氣違い同様。お浜も悲歎にくれてばかりいて何にも知らず、その上修驗者道尊坊どうそんぼうが来て、夜中まで熱禱を続けていたので、隣りの物音も聞かなかつたと言うのです。

「お角が、盜人ぬすつとを知つていたでしょか、親分」

ガラッ八は囁やきます。

ろう

「」

「昨日三枚の小判を隣りのドブ板の隙間から拾つたと言つたが、隣りのドブ板にはそんな隙間はないし、あつたところで、三両の小判が気を揃えて隙間へもぐり込むわけはねえ、それに、——お角は商売人上がりで大寝坊だ。ドブ板や往来に、夜のうちに落した小判が、お角が起き出す迄無事でいるわけはねえ」

「盗人を嗅ぎ出して強請つたんじやありませんか。それ位のことはやりかねない女だ」

九百九十両

「盗人は容易ならぬ人間だ。それを強請るにしちやお角の様子は

暢氣過ぎた。俺は盜人の隠した金を探し当てたんだと思うよ

「成程ね」

が併しかし、平次の知恵もこれ以上には遡さかのぼりません。

「隣りへ行つて、もういちど様子を見ようじやありませんか」「よからう」

二人はもう一度、多の市の家へやつて行きました。が、そこの陰惨な空氣は、暢氣者のガラツ八をも窒息ちっそくさせそうです。多の市はたつた四五日の間に、すつかり衰やつれ果てて、冥土から來た幽鬼おのよのように、物をも食わずにうめき続け、お浜はすつかり怯ゆうえ切つて、部屋の隅に踞うずくまつたまま、涙も涸かれそうに泣いているのです。

「八、こいつは唯事じやないぜ」

「へエ——」

「お浜は盗人も、人殺しも知っているんじやないか、お浜があんなに心配するのは誰の身上だと思う」

平次は路地を出るとこう言います。

「吉三郎じやありませんか」

「俺もそれを考えていたよ、行つてみよう」

二人はツイ一と走り、吉三郎の家まで飛んで行きました。店の奉公人と近所の人達に念入りに訊くと昨夜も吉三郎は一足も外へ出なかつたことは、同じ部屋で寝て いる三人の奉公人達が口を

揃えて証明しております。

「親分、変じやありませんか」

「変だが、仕方がない、——ところで八、俺はすっかり忘れていたが、お浜には母親があつた筈だが、知っているか」

「へエ、十年前に亭主の多の市と別れて隣町で細々と仕立物したてものをしながら暮していますよ」

「行つて見よう、八」

「無駄ですぜ、親分。十年も前に多の市と別れているし、お皆といつて、貧乏はしているが、町内では評判の氣のいい女ですよ」

ない筈だ

「でも、お浜は、小判の竹筒たけづつが盗まれて、三日目には親分のところへ飛込んで来たじやありませんか、自分のお袋の仕業しわざと知つたら、あんな事をする筈はずはありません」

文句をいう八五郎を後ろに、平次は、お皆——多の市の元の女房の家へ駆けつけます。

七

「親分さん、お浜がそんなに泣いているなら、みんな申上げてし

まいります。小判を隠した竹筒は、この私が盗つたに相違ございません」

四十女の貧し氣なお皆は、平次に問い合わせられるまでもなく、泣きながらこうスラスラといつてのけるのでした。

「その小判をどうした、どこに隠してある」

後ろから八の差出口です。

「それが一向判りません、あの家から盗み出したのはこの私ですが、それをまた人に盗られてしましました」

こういうお皆は、この上もなく質素な調度の中に暮しておりますが、何となく確り者らしい中年女でした。

しつか

「それはどう言うわけだ」

平次も思わずせき込みます。

「詳くわしく申上げましょう。お聞き下さい、親分さん」

お皆の言うのはこうです。夫の多の市が検校になりたさの野心に燃えて、非道な高利貸こうりがしを始め、生活を極度に切り詰めて、手強く意見をするお皆を裸にして放り出したのは今から十年前、お皆は人知れず娘のお浜りんしょくと往来ゆききして、夫の心の解けるのを待ちました。が、多の市の非道と吝嗇つのは年と共に募るばかり、とうとう吉三郎とお浜の仲まで割いて、千両の金が纏まとまつたのを機会に、いよいよこの月のうちに、京都へ上ることに決めてしまったのでした。

お皆は矢も楯もたまらぬ心持でした。お浜可愛さとそれを慕い寄る吉三郎のいじらしさ。その上自分が、十年の恐ろしい艱苦に晒されたのも、多の市が柄にもない検校になる野心のためと思うと、腹の底から忿怒が煮えくり返ります。とうとう夫の家へ忍び込んで、たつた一日で千両の金を隠し、浅ましい夫に、思い知らせてやる気になつたのです。

九百九十両

多くの市が珍らしくお祝の酒を買わせたと聞いた晩、お皆はどうとうこの企の实行に取りかかりました。お浜は其処で気が付きましたが、母の仕業と知つて、素知らぬ振りで狸寝入りをしていたのです。

母が盗つた小判の筒は、縁の下の柔かい土に半分埋めてあつたのを、お浜は翌る朝になると見て取つてしましました。父の半狂乱に気を揉みながらも、母の目論見の底を割りかねて、黙つてしばらく様子を見て いるうちに、多の市は似非修験者の道尊坊を頼んで来て、大袈裟な祈禱おおげさ きとうを始めました。

お浜はその間にちよつと抜け出して、隣町の母親を訪ね、その気持を確めると、帰つて縁の下から、小判の竹筒を取出し、改めて父親に意見をするつもりでしたが、帰つた時は、もう誰かに取出されて、縁の下の竹筒は影も形もなかつたのです。

行つたのでしよう。娘はあまりのことには仰天して、翌日錢形の親分さんのところへお願ひに行つたそうでございます」

お皆みなは静かに顔を挙げました。お浜に似て昔は美しかつたでしよう、貧に窶やつれ果ててはおりますが、何の邪念じやねんがあろうとも思われません。話の筋道も、まことによく通ります。

「すると、お角を殺したのは?」

ガラッ八はまた口を出しました。

「縁の下から竹筒を盗んだ曲者だ」

平次は静かに、組んだ腕をほどきます。ここまで来ると、平次の心に事件の全貌がはつきり投影した様子です。

## 八

「もう一人、置床の柱に小判が入っている事を知っている者が  
あつた筈だ。それを思い出しさえすれば、盜人はすぐ捕まる——  
が」

平次は取乱した多の市をシャンと坐らせて、その前にむずと膝  
を組みました。

九百九十両

「娘と隣りのお角と、吉三郎と、外に竹筒の事を知つてゐる者はあ  
りませんよ、親分」

「いや、ある。きっとある筈だ」

平次の手は、多の市の顫える手をギュッと押えてあります。

「祈禱きとうを頼むとき、道尊坊さんには、置床の柱に見せた竹筒に九百九十両入つたのを盗まれた——と話しましたが、それは盗まれてから後の事で」

「成程、盗まれてから後の事か——、八、行こうか」

平次は立ち上がりつて八五郎に合図しつぶうをすると、疾風しつぶうの如く道尊の庵室あんしつへ飛んで行きました。

「御免よ、道尊さんはいるだろうね」

弟子の少し足りない顔をした男が、ノソリと二人の前に突立ちます。

「どこへ行つたんだ」

「ここは狭せまくなつたから、新しく祈禱所を建てるんだと仰しやつて、二三日前材木や地所を買う約束をした筈ですよ。今日はその地所でも見に行きなすつたでしよう」

「そうか、——ちよいと、中を見せて貰うぜ」

「へエ——」

「俺はお上の御用うけたまわを承る者だ」

平次は返事を待たずに入り込むと、ガラツ八と手分けして、狭

い祈禱所を隅から隅まで捜しました。護摩壇<sup>ごまだん</sup>も、天井裏も、床下も、押入れも、一刻ばかりで見尽しましたが、竹筒は愚<sup>おろ</sup>か、小判の片らも見付かりません。

「買う約束をしたという地所はどこだ」

平次は呆<sup>あつ</sup>気に取られている弟子を顧<sup>かえり</sup>みます。

「松永町の裏で」

「よしよし、余計な事を言っちゃならねえよ」

九百九十両

えません。

「八、こいつは面白くないな、地主へ行つてみよう。手金を小判で払つていりや占めたものだ」

平次の動きは疾風迅雷しつふうじんらいです。が、地主へ行つても予想は見事に外れました。道尊坊が土地を買取る約束をした事は確たしかですが、まだ手金を一文も払つてはいなかつたのです。

それから平次は、佐久間町を中心に、神田中の材木屋を片つ端から訊ねて歩きました。

「修験者の道尊坊が、材木を買う約束をしなかつたか——」

と言う平次の問いに、困つたことに点頭うなづいた材木屋は一軒もありません。

「川を越してみようか、八」

そんな事はあり得ないと思いながら、とうとう柳原河岸へ行つたのはもう夜、その辺で一番大きな材木屋で平次はようやく捜しだいたモノに出逢<sup>く</sup>ました。

「二三日前に、そんな約束をしましたよ。祈禱所を建てるんだからと仰しやつて揃<sup>そろ</sup>つた材木を一と山二十八両の約束で」

「手金は

「へエ、それがその面白くございません。御都合があると仰しゃつて、ほんの形ばかり、小粒と錢で一分二朱頂戴いたしまし

「

平次はがつかりしました。二三日前では日が余り違ひ過ぎる上、小粒や錢で大事の手金を払うようでは脈みやくがありません。

「この不景氣ですから、それでもお約束致しました。一ヶ月は材木をあの儘、手を付けずに置くという事にして、へエ——」

「それは何時から積んであつた材木なんだ」

「ずっと前から十二三本杉丸太のあつた上へ、三日ほど前荷が入つたので、ほんの間に合せに杉丸太を下敷にして檜材ひのきざいを五六  
本積みましたが、それがお気に召したそうでへエ——」

平次は黙つてそこを出ました。

「親分、どこへ行きなさるんで」

「二三日前に積んだ材木は気に入らないが、とにかく其処へ行つてみるとしよう。そこで竹筒が見付からなきや、まず諦める外はあるまい」

二人は材木屋の店を出ると、遅い月の出の薄明りに照らされながら、河岸かしの材木置場へ廻りました。

「おや、変な音がしたようですぜ、親分」

「材木の崩くずれた音だ、急いで行こう」

二人は物音のした方へ飛んで行きました。

九百九十両

「あッ」

幸いの月明り、すかして見ると杉なりに積んだ檜の巨材の間に  
何やら蠢めく物。<sup>うご</sup>

「それ行け、八」

飛込むと、それは大きな材木の間に、左手を突っ込んだまま、  
抜き差しもならずうめく人間の姿ではありませんか。

「道尊坊だ」

変哲な法服と、鬚面が紛れもありません。<sup>まぎ</sup>

「罰が当つたのだよ」

平次もしばらくは手の下しようもありません。

「助けてくれ、苦しい、——苦しい」

ちゅうちょ

くず

平次とガラツ八はもう躊躇しませんでした。崩れた材木を起して、左腕を折った道尊坊を引出し、ともかくも手当をさせて腰繩を打つてしましました。

「九百九十両小判を入れた竹筒を盗んで、お角を殺したのはお前だろう、——六日前に杉丸太の間へ竹筒を隠したが、その上へ檜の角材を積まれ、折角の竹筒が取出せなくなつたので、祈禱所を建てると言つて、要らない土地と材木を買つたろう」

「恐れ入ります」

九百九十両

「お角はこの材木置場へお前を跟けて来て、落ち散つた小判を拾つた筈だ。その口を塞ふさぐために殺したのは罪が深過ぎたぞ」

「」

道尊坊は黙つて首を垂れます。

材木を取除けると、果してその下から竹筒に入れた九百九十両の小判が出て来ました。いや、九百九十両というより、九百八十七両といった方が正しいでしょう。

×

×

九百九十両

道尊坊は獄門ごくもんになりましたが、平次の情で、お皆にもお浜とがにも、何の科もなくて済みました。そればかりではなく、多くの市も我慢の角を折つて、十年別れ住んだ女房のお皆といつしょになり、お浜と吉三郎を娶合めあわせ、平凡ながら、腕の良い按摩あんまで無事に一生

九百九十両

を終つたということです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままでしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩　柚月

九百九十両

初出——「オール讀物」昭和十二年六月号　文藝春秋社

九百九十両

底本——「錢形平次捕物全集」第三卷

河出書房

昭和三十一年六

月十五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>